
Bec P 8

水島 零

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B e c P 8

【Nコード】

N 7 0 8 2 G

【作者名】

水島 澪

【あらすじ】

B e c P 8とは、8人の子供の刑事が活動する、警察の特別班。「子供」ということを生かし、彼らはどんな活躍をみせるのか・・・？

プロローグ

コッ コッ コッ。

「おはよう、真理ちゃん。」

「おはよ、真理ちゃん！」

「おはようございます。皆さん。」

コッ コッ。私達 Bec P 8 専用の靴が音を立てる。

Bec P 8。ベック・ピー・エイトは、国全体から集められた天才児・・・（子供）が、現代の刑事の手に負えない事件を担当し活動する、警察の特別班である。

Bec とは「小さき者」という意味があり、P はポリス、8 は 8 人、全部繋がると小さき 8 人の刑事という意味になる。

さて、先ほどからたんたと歩いているのは Bec P 8 のメンバー、はらだ 原田 まり 真理。少し茶色の髪の毛をふたつに結び、いつもにこにこしていて、署内では人気があるかわいい少女である。胸にきらめく Bec と描かれたバッジは 8 人専用で、これを見せればただの子供ではないことがしよめいされる。

彼女達は、子供ということを活かして学校へ潜入調査を行ったり、学校内の事件を解決したりなど（主に学校絡み）の成果を上げ、本部からはかなり気に入られている。

通称「Bec」と言われている彼女達の班の活動は、これからもずっと続くだろう。

この話は、その彼女達の活躍を描いた物語。

プロローグ（後書き）

書くのは初めてです。

こんな話があったらいいなと思って作ってみました。

刑事もの、探偵ものなど大好きなので・・・。

亀スピードですけど、目にとめてもらえたらうれしいです。

第一章の幕開け

ガチャ

「おはよう。」とびらを開ける。

「おはよう、原田。」

こちらは彼らの班長、若宮 潤。

「どうも、班長。」

「もう二人とも堅いつて♪×2」

若宮は、キツとふりかえる。ちなみにこの班長、硬派で有名なのだ。

「そんな睨まないでくださいよう」

その性格は豪放磊落、スタイルのいいこの美女は、坂本 可憐。

ごんっ

「悪い、お前があまりにも緊張感なさ過ぎるから、手がすべった。」

明らかにわざと可憐にファイルをぶつけたのは、ツッコミ役の常識人、佐藤 巧。

言い合いを始める二人は放って置いて、真理は席に着いた。

「っはよーさん！真理！」

「おはよ、真理ちゃん。」

「おっす、真理。」

テンションの高い順に、いつも明るい本田 京介、メンバー最年少・中島 悠樹、さわやかな五十嵐 カズマ（いがらし かずま）。

「おはようみんな。おはよ、紫乃。」

「はよ、真理。」

朝からたんたんと書類整理をこなしているこのクールな黒髪美人は、桐生 紫乃。

「朝っぱらからこんな真面目にしないでいいじゃないの。」
と、可憐。

「誰かさんがいつつつつもサボらなければいいんだがな。」

バツサリと切り捨てる紫乃に対し、可憐は「う……」とびくついている。そこへまた、火種となるきょうすけが……。

「まあまあそんなおこるなって。紫乃もそんな目つき悪……」

「うるさいだまれフヌケ。この書類の山をみる。それと目つき悪いはよけいだ。」

日常の平和な風景を見て真理は、フツツと微笑ましく笑ったのだ。
った。

そんな中、彼らの司令官、田辺たなべ 良平りょうへいは指令を持ってきて、

「じゃ、若宮君、頼んだよ。」

と出て行った。

今回の任務

「よし、全員揃ってるな。今回の任務だ。・・・五十嵐。」

「はいはい。・・・今回も学校捜査、解決を目的とする、だと。学校名・盟悠めいゆう小学校。この六年一組の遠藤えんどう 司つかさは金持ちゆえ、いじめ、暴力がたえないそうで、なんでも気に食わない担任を次々とめさせちまうらしい。可憐、書いてるか？」

「うん。」

さらさらとホワイトボードにまとめているのは、さすが書記の可憐。「で、その問題児をおさえると。なんだ簡単じゃん。」

そう言い放つ京介。これに答えたのは若宮。

「いや、そうでもないぞ。その遠藤 司はなかなか頭が回るらしい。前回は刑事がなんとか処理しようとしたらしいが、証拠や写真を一切取らせないらしい。ここにも写真ないだろ？子供だからと言って放って置くと、さらに問題を起こすかもしれない。」

「それで、こっちはお手上げだから、僕達に回ってきたってわけね。おもしろそう。」

にやりと笑う、時々黒いところがある悠樹・・・。

「そういうことだ。今回は8人全員でるぞ。制服はそこに用意してある。明日から六年一組の生徒「きゃああ！！かわいい！！！！」・・・話を聞けよ坂本。」

「だろ？俺、京介様が注文したんだぜ？」

「・・・おい、なんで私のだけネクタイなんだ。」

「えー？だって紫乃はリボンよりネクタイのほうが似合うだろ？つかスカートよりズボンのほうがいいぐらグフォ！！！！！」

余計な言葉をはなつた京介に見事に紫乃の飛び蹴りがヒットした。

「いきなり蹴らなくても。だいたい男みたいなのは本「もう一発く

らうか？」すいませんだからそんな構えしないで下さい。」

「もう紫乃、そこまでにしといたら？」

真理がなだめると、

「チツ仕方ないな。」

と言つて構えをやめた。

「へえ、結構かけえじゃねーか。班長、あんたの分だ。」

「おう。」

こっちはこっちで盛り上がっていたが、巧はあることに気付いた。

「そついえば可憐は？」

可憐はいな・・・くもなかった。

「じゃーん！どう？似合う！？」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

見事に全員ハモツた。

さて、これからどうなることやら、果たして解決できるのか・・・。

可憐の愚痴。

「ねえねえ、6-1転校生8人も来るらしいよ」

「らしいね。でも何で8人同じクラス？」

「いやー、なんかわけありらしいよ?」

「気の毒にね、司様と同じだなんて。」

「関わらないようにして。」

9月。盟悠小学校の校門の前には、例の8名の姿があつた。

「一応俺ら平均年齢12だけどよ、小学生ってなんかしっくりこねえな。」

とまあ最初からブツブツ言っているのは、五十嵐である。

「文句言うな。．．．行くぞ。」

「うーっす。」

「それじゃ、転校生を紹介します。皆さん、入って。」

ガラガラツとドアを開けて入ってくるのは、お馴染みの面々。

「自己紹介をしてくださいね。」

「若宮潤だ。よろしく。」

「五十嵐力ズマです。よろしく。」

「佐藤巧。よろしく。」

「本田京介！よろしくう！」

「中島悠樹です。よろしくね。」

「原田真理です。よろしくお願いします。」

「桐生紫乃。・・・よろしく。」

「坂本可憐です。可憐って呼んでください！よろしくうー！！」

それぞれ違う話し方をするメンバー。可憐はポーズまでとった。
が。反応は・・・

しーん。

「じゃあ、皆さんは空いている席に座って下さいね。」

なにこいつら、空気悪つ……。と可憐がグチったのは皆（可憐をのぞいた7人）無視した。

若宮は、教室を見回す。特に目立つ者はおらず、この状況から遠藤司を見つけるのは無理そうだ。

「じゃあ、一時間目は自習ですから。静かに取り組んで下さいね。」
そう行つて、先生はそそくさと出て行った。

（自習つていわれても、教科書もないんですけど・・・。）
真理はブツブツ言いながら、席に着いた。すると、隣の男子が、
「はじめまして！」

と、話しかけてきたのだった。

「俺／私、あいつら嫌い。」

「三浦和正ってんだ。よろしく、原田さん！」

「え、えと・・・とりあえず、よろしく？」

この暗い雰囲気の中、一人陽気に話しかけてきた、この三浦という男子。

真理は、この人に聞けば分かるかもと考えた。

「よろしくね。三浦君。」

「和正でいいよ。」

「じゃ、和正君。・・・遠藤 司って？」

「和正だって。何、司様が目的なの？」

「い、いやそうじゃないよ。有名みたいだから気になって。」

「ふーん。ああ、転校生にはね、正体バラすなって司様に言われているんだ。教師もだよ。」

「でも、一応知ったときだけだなあ・・・」

「やめといたほうがいいよ。確かにこの中にいるけど、前、警察まで来たんだ。しかも、あんたら昨日まで部外者だった。そう簡単にバラさねーよ。」

キーンコーンカーンコーン

キーンコーンカーンコーン

「今から休み時間だ。俺、委員長やってるんだよね。もう一人も連れてくるから、仲間集めてちよつと待ってるよ。」

そう言うと、バタバタ出て行ってしまった。

仲間集めて待ってると言われても、みんな自然に集まってくるわ

けで。

「ああもうム力つく。周りに話しかけたけどみーんな無視。ホント腐ってんじゃないの、この学級！」

いきなり可憐がグチった・・・。

「そんなことないよ。私の隣、すごくいい人だったよ。でも、遠藤司は自力で探すしかないみたい。仲間集めて待つてろって・・・」

「おーい、原田さーん！女子の学級委員長連れてきたー！！」

「岡崎世良です。何かあつたら声かけてね。」

「なーんだ、結構話しやすい人いたね。」
と、悠樹。

8人は只今、給食を食べ終えた後の休み時間なので、屋上にて会議中。

「でも、あの二人も遠藤司のこと教える気はないみたいだぞ。」
五十嵐が言った。

「うーん、そうだな・・・。おい、その三人、どうした？」

そのの三人とは、先ほどから全く喋らない、巧、京介、紫乃の三人である。

「どうしたの、三人とも。さっきから全然・・・」

「俺／私、あいつら嫌い。」

そう見事にハモったかと思うと、スタスタと教室へ帰ってしまっ
た・・・。

なかなか本題が始まらない

「ねーねー、何で世良達のこと嫌いなのよー？」

八人は只今下校中。と言っても自分達の本部へ帰るところ。
可憐は既に岡崎世良と仲良くなっている。

そのため、なぜ巧と京介と紫乃が、気の良い三浦達を嫌うのかが
気になって仕方がないのだ。

「そうそう、和正君も世良ちゃんもいい人なのに、なんでー？」
真理も気になる様子。

そして、女子二人（時々その他男子三名）の猛攻撃しんこうにしびれを切
らしたのか、京介が、

「あーもう分かった分かった。本部へ帰ってから話す！」

「ここじゃ、誰かに聞かれそうだしな。」

と、巧。

「ざっと十人か。・・・走る？」

紫乃は鏡を持ちながら言った。その鏡に写るのは、自分達を尾行
する、十数名の・・・小学生。

そして八人は同時に駆け出す。さすが天才児、運動力も抜群で、
あっという間に尾行軍を巻いてしまい、後に残ったのは啞然とする
尾行軍であった。

じゅー。

とストローでパックのミルクティーをすすっているのは、紫乃。

ちなみに本部へ帰ってきた時丁度、田辺司令官が笑顔で迎えてくれた。

のに京介が、独身の田辺に、いい女の人紹介するからと言って、一人一本120×8＝960円ジュースをおごらせてしまった。

かわいそうに、田辺は

「夕飯が・・・」

と嘆くのだった。天才児京介&男の欲望、恐るべし。

「で、何で三浦と岡崎を嫌うんだ？」

そうでした、班長。本題はそっちでした。

すると京介は後ろ手にポイツと紙パックをゴミ箱へ投げ捨てた。いつもだったら絶対に入るといふ微妙な特技を持っている京介だが、ゴミ箱のそばにいた巧に、

コンッ

といい音を立ててあたった（しかも頭に・・・）。

「京介テンメエ・・・」

「あ、ごめんなちゃん、あたっちゃんいまちたか。許して下さい巧ちゃん。」

「さっさと教えるおお！！！！」

五十嵐とうとう切れたのだった。

推理と少女の悪夢

「話し安すぎる。」

「え、いきなり？」

「・・・黙ってる。」

いきなり本題に入った巧。

相当機嫌が悪いらしく、京介をすぐに黙らせた。

「自分の正体ばらすなって言われてるなら、黙っというて俺達に構わず放っぽつとけばいいじゃねーか。なんでわざわざ構う？それに・・・」

「仲間」って知ってたしな。」

今度は紫乃にバトンタッチ。

それに真理は、ハッと顔をあげた。

「真理と話した後、『仲間、集めて待ってる』って言ったんだろ？噂が回っていて、八人全員同じクラスはおかしな話だと思うかもしれないが、「仲間」「知り合い」とまで、現時点では分からなかったはずだ。」

「そっか！だから世良たちのこと怪しんでたんだ。」

なるほど、とみんな納得した様子。

「でも、和正君達そんな悪い人じゃないと思うんだけどなあ・・・」

真理は、受け入れがたい様子。だが、京介が珍しく、口を挟んだ。

「だから、俺らは『怪しい』じゃなくて『嫌い』だって思うんだ。猫かぶりみたいで。真理も気を取られないようにな。それと・・・」

班長が重々しく口を開いた。

「三浦和正が【遠藤司】かもしれないということ。」

周りには、普段と違ってなんともいえない雰囲気広がっていた。

——ち、ち、血、血、血——

辺りは血の海。中心で倒れ、手足を見知らぬ男に切り刻まれているのはまぎれもなく自分の両親。

声を上げること出来ず、荷物をドサツと落とした音に気づき、男は振り返る。

笑

少女は逃げた。ただひたすらに。

隣のおばさんに助けを求め、意識を手放した後、幼い彼女に残ったのは――

一面の血の海と、記憶に刻まれた、笑

そして、少女は、今日も悪夢を見る。

推理と少女の悪夢（後書き）

すみません。

最後意味不明だと思うでしょうけど、これから繋げていく予定なので、ご了承下さい・・・。

まだまだがんばるので、よろしくおねがいします。

寝顔の裏

京介は、固まっていた。

何しろ班長は、三浦和正と岡崎世良の隠し撮り写真を撮りにいくとかで、皆を引き連れて、どこかへ出て行ってしまったのだ。

しかも、

「お前が来ると面倒だから、紫乃と一緒に留守番してな。」

と五十嵐に拒否されてしまった。

あんまりではないか。ひどすぎると演技してみたものの、見事にスルーされ、よよ・・・と悲劇のヒロインを今度は紫乃に向けたが、こちらも見事に無視されて。

で、冒頭に至る。

「私、昨日あまり寝てないんだ。少し仮眠を取るから、起こすなよ。」

と、紫乃は毛布に包まって、ソファでさっさと寝てしまった。

「留守番って、することねえんだけど。」

呟いてみたが、返ってくる返事はなく、書類整理にしぶしぶ取り

組むきょうすけだった。

隣の少女が叫びながら助けを求めて飛び込んで来た後、おばさんは少女を取り合えず落ち着け、どうしたものかと彼女の家をのぞいた。そこには。

血の残劇と、荒々しく残っていた争った後。

警察が駆けつけ、犯人は捕まった。

まだ18の若者だった。動機は、

「幸せを、ぶっこわしてやりたかったんだ」

少女は、それからは施設に預けられた。

優しい大人、同じように精神が傷ついた子供達がいて。

少女は歓迎され、不自由なく暮らせるはずだったが。

少女は誰にも心を開かず、部屋の隅で縮こまっているだけであった。

京介は、ふと、紫乃の顔をのぞいた。

いつもと違う、安らかな寝顔だった。

そつと紫乃に近ずくと、彼女の黒髪に触れてみる。

・・・以外にサラサラだった。

「寝てるときは、結構かわいいのに・・・」

「ってなに言ってるんだ俺。」

自分のセリフに乗り突っ込みすると、また、書類に視線を戻した。

張り込み？

「はんちよー！ー、撮れました？」

「なかなか出て来ないんだ。……。あつ、来たぞ！！」

こちら盗撮班。三浦和正はラッキーなことに家から出てきたところを捕らえてパシヤリ。

この調子で岡崎世良も・・・と家付近に張り込みを続けていたが、出てくる様子がなく、待つこと3時間半。

刑事といってもまだ子供だから、当然飽きてくる。

まだかまだかとうるさい可憐に食料到達を命じ、さらに続けること15分。

家からやつと出てきたわけだ。

そこをパシヤリ。

「どうします、班長。あとを追いますか。」

「いや、今日は隠し撮りメインできたんだ。それに、あのバック見る限り習い事か何かだろう。追っても仕方がない。帰ろう。」

と、いうわけで、たったの3時間45分間の張り込みは終わった。

「．．．乃．．．紫乃．．．．．紫乃！！！」

ハッ

「大丈夫か、随分うなされていたけど．．．」

紫乃は、うなされて目が覚めた。
全身にびっしょりと汗をかき、うなされていた紫乃を、京介が起こしたのだった。

「ほい、タオル。」

「．．．．．ごめん。」

「いって。それよりお前こそ大丈夫．．．．．紫乃、もしかして今誤った!？」

「誤っちゃ悪いか。」

「まじかよ!!!!!!!!!!俺人生で初めて紫乃に誤られた!!!!!!!!!!」
「.....」

こんなやり取りを続けていると、盗撮班が帰ってきた。

「たっだいまああ!!!!!!!!!!」

ゴスン

「た・く・み。アンタ毎度毎度・・・」
「済まん。思わず手が滑った。」
「この二人もいい加減見飽きたな・・・。」
「うん、飽きた。」

取っ組み合いを始める二人を横目に、ぶつぶつ言いながら五十嵐と悠樹が入ってくる。その後に班長、真理、と続く。

「入手成功した。役に立つかは分からないが・・・、明日からまた学校だからな。気を緩めないように。」
「.....はい!」「.....」

8 + 1 & a m p ・ゴキブリ

休み時間。

今回は屋上ではなく、教室からお届けしよう。

・・・それが裏目にでたのだが。

ソイツは丁度、可憐の足元に現れた。

カサコソ×2

「ぎゃ——————?????!!!!!」

13歳の乙女らしからぬ悲鳴をあげて、机の上に飛び乗った。
わずか1秒。

さすが天才児・・・と言っているのだろうか。
ちなみに可憐は、メンバーの中で一番運動神経の良い、五十嵐と
並ぶほどのだ。

「ああ、なんだゴキ」悠樹、ストーーーーーッブ!!!!!!!!!!」ほ

んと虫嫌いだね、可憐。」「さつさと潰そうぜ。」「

スパン

五十嵐の出番より先に、ゴ……その物体に新聞を直撃させた者がいた。

「誰だ！久しぶりの俺の出番取ったヤツ！！」

「え……えと、ご、ごめんなさい。つつい……」

顔をおおった長い前髪。中途半端に切られた髪の毛。

その子は、班長の隣の席の……

「お前、鮎川？」

「え・・・？そうですけど・・・。」

クラスの中で一番浮いている、と言ってもいいこの少女は、
鮎川あゆか
小百合わさゆり。

小百合は新聞を手に、ゴ・・・じゃなかった。もう、めんどいなあ。

普通に言えば？by巧

ありがとう巧！！

ゴキブリを叩き潰したのだった。

「ありがと！！助かった！！！」

「え、いや、私は・・・」

「ま、あのままじゃ可憐、気絶してたかもね。」

「俺の出番・・・」

「よろしく、小百合！！！」

「えっと、よろしく・・・？」

かくして、八人は知り合ったのである。

ゴキブリ退治で？とはつつこまないであげて下さい。

小百合はなにも、遠藤司の気に障るようなことはしていなかった。
明るくて、前向きで、それに・・・すごく可愛かった。

本人に自覚はなかったが、すごくモテたし、友達も沢山いた。

そんな日常で、それは始まった。

「モテるからって調子乗ってんじゃないわよ！！！！」

「目障りなんだよ！！！！」

「死ね、ばあか。」

「その髪、見られないようにしてあげる。」

「やめて！！！！私はなにもしてない！！！！いやあああああああ
あ！！！！！！！！」

ジャキン

ハラ・・・

「いい気味。これからまた出しゃばったらもってやってやるんだからね。」

「わかったら消えろ。」

「そう、辛かったんだね。」

「私は何もしてないはずなの。もしも悪い所があるなら直すし、誤りたいけど・・・。」

このこと人に話すの初めてなの。聞いてくれてありがとう、みなさん・・・。」

屋上。小百合と仲良くなった八人は、彼女の話聞いていた。小百合はずっと黙っていたことを、我慢できなくなったように喋った。

ぎゅっとスカートの端を掴む小百合はすごく辛そうで。
八人も、心が痛んだ。

「・・・ッ・・・つく・・・」

可憐はそつと小百合を抱きしめる。

「泣いて・・・いいよ。私達は、あなたの見方だから・・・。」
「・・・う、うあああああ！！！！！！」

夕焼けだけが、それを見つめていた。

真実

自分と、重なった。

同年の子とは打って変わって並外れた理解力、ずば抜けた運動力。

好きで力を手にしたわけじゃない。

でも、みんな分かってくれない。

学校でも、どこでも、一人。

分かってくれるのは、両親だけだと思ってた。

この才能を、活かすことはできないだろうか。

届いたのは、警察からの手紙、応募書。

そのときのあたしには、迷いはなかった。

そして、数々の試験をなんなく突破し、入った場所は、BeCP8。

七人と出合って、本当の自分、「坂本 可憐」が見えた気がした。

あたしには、かけがえのない存在。

だから、目の前のこの少女の気持ちが痛いほど分かった。
聞き出したのもあたし。

ただ、見方だよって、言っただけだった。

「ありがとう。坂本さん。」
「可憐でいいの。こっちも助かったし。」
「ゴキブリでな。」
「やーめーてー！ー！」

「気にするな。あの二人はいつもああだから。」

取っ組み合いを始める巧と可憐に啞然としていた小百合に対し、五十嵐が声をかけた。

「小百合さんは、他の人とは違うね。」

真理が言った。

「え・・・？」

「だって、心から真っ直ぐに話してくれるから。」

驚いた小百合に悠樹が答えた。

「私達の事、この子には話しても良さそうですね、班長。」

「そうだな。鮎川。」

紫乃と若宮は、話すことにした。自分達、Beccp8のことを。

「・・・と、いうわけだ。」

あれから面々は、図々しくも小百合の家に上がりこんだ。彼女の親は家を空けることが多く、この日もいなかったからだ。

八人は自分達のこと、遠藤司を調べていることなどを、大方全て話した。

小百合は、突然のことに頭がついていけないだろうかと思われたが、とりあえず八人はただの子供ではないということと、遠藤司目的だということは理解したようだ。

「すごいんですね。みなさん。私と比べられない・・・。」

「そんなことないわよ。あなたと同じ、ただの人間。」

「そうですね・・・。私なんかと仲良くしてくれて、本当にありがとうございます。」

「気にするな。」

「はつきり言います。役に立つか分かんないけど・・・。」

「三浦和正は、遠藤司です。」

『?!』

何でそうなる？／影

「やはりな。」

最初に口を開いたのは紫乃だった。

「岡崎世良も、女子のリーダー的存在でしょうね。」

真理も感づく。

「三浦と岡崎はグルだな。三浦・・・もとい、遠藤司はなぜ三浦和正と名乗っているか、わかるか？」

京介の問いに、小百合は首を横に振った。

「分からない。でも、岡崎さんは私の事をすごく嫌っています。」

「見えたな。つまり岡崎は鮎川のことを嫌い、三浦は岡崎に手を貸し、全校がお前のことをいじめるように手を回した。教師にも。」

巧がたんとまとめていく。

「よし、鮎川、俺達と仲良くなったことは誰にも話すな。どこから主犯の耳に入るか分からないしな・・・ちよつとの間だけだ。俺達が、やつらを少年院に送るまで。要するに、

潰すまでの間。」

「よし、明日から反撃だ！！小百合、まだ2時だから！遊びに行こうよ！！」

「え・・・？いいけど、どこへ・・・？」

「ショッピングセンターよ！！ついでにゲーセンよって行こ！」

「ああもう、ツつこむ気も失せた。」

「おい坂本、お前いい加減に・・・」

「班長もどうです？」

「断る。」

いきなり買い物と言い出した可憐と、珍しくツつこまない巧と、巻き込まれた若宮を横目に、五十嵐と悠樹と京介はコソコソとなにやら話していた。

「おい、やっぱ気になるよな。」

「うん。僕も下から見上げたときから。」

「すげー気になるよな。あの・・・」

『前髪の下。』

それをちゃっかり聞いていた真理は、小百合に声を掛けた。

「小百合ちゃん、ちょっと前髪上げてみて？」

「え、いや、私自分に自信ないから・・・／＼／」

『俺達すげー気になるんだけど。』

「ほら、上げてみて？」

「・・・ちよつとですよ？」

小百合は目をつむり、前髪を右手で掴むと後頭部へ持っていく、ゆっくりと目を開けた。

「・・・わお。」

薄い反応を返したのは、紫乃だけだった。

全員、硬直。

本来結構メンバーの女子三人は美人だと思われるのだが、小百合も彼女達と並ぶほど。いや、三人よりかわいいかも。

大きい瞳、筋の通った鼻、ピンクの唇、愛らしい表情、普段の暗い面影はどこへやら。

人って変わるもんだな・・・と紫乃は一人思った。

「小百合ちゃん、すごく可愛いね!!」

「なんでそんな隠してるのよ！！ついでに美容院もいきましょ！ほら、あんた達もいつまで固まってるの！」

と、いうわけで（？）全員可憐の買い物に引つ張り出されたのである。

着いたのは、大規模のショッピングモール。

現地には小学生（仮）九名と大人一名。

小学生だけでは行っではいけない決まりなのだ。つまり、保護者同伴。

で、例の大人とは、もちろん・・・

「はあくなんで俺、司令官なのに保護者役やってんだろ。」

京介にまたまた言いくるめられて連れてこられた、田辺である。

今回は可憐も加勢して、

「司令官、今ならもなく私の『絶対モテる、可憐のスペシャルコ
ーディネート』が受けられますよ？」

と、誘惑に負けて、連行されたのだ。

この二人が手を組んだら、恐ろしいことに巻き込まれるなど、紫
乃は平然と思った。

「レッツゴー！」

かくして、皆引きずりこまれたのだった。

それを遠巻きに睨む、何人かの影があったのだが。

急展開

「・・・おー、やっぱ人って変わるもんだな。」

『・・・／／・・・』

「見違えるね！」

「はっ、はずかしいよ・・・。」

小百合は今、毛先がくるとカールしたロングヘアに、緑色のワンピース姿。

さらに白色のガウンを羽織り、ウエスタンブーツを履いている。

その見違える姿に、男子軍は、

『・・・（かわいい・・・）／／／』

という、硬直状態にある。

「ね、かわいいでしょ？」

可憐がひょっこり出てくる。

一瞬可憐のことを、初めてすごいと思った一同であった。コーデイナーをしたのは、可憐なのだから。

それに並んで、田辺も出てきた。

「かつこいいじゃないですか、司令官―」
「お前棒読みだろ。」

小百合ほどではないが、田辺も流行のファッションで、いつもより輝いていた。

が、無関心な紫乃は、どうでもいいといった様子で（途中で買った本を読みながら）棒読みを放った。

そこへ、巧の突っ込みが入る。

「あのっ、ありがとうございます。こんな可愛い服買っていたいただいて・・・」

「いいんだよ、大人が払わないとかつこ悪いからね。」

小百合の服を買ってあげ、強がり言ってみたが、財布の中身が寂しい田辺であった。

「・・・くそっ・・・」

翌日。若宮は、必死に走っていた。

学校に着いたのは良いものの、小百合の姿が見えないのだ。

しかも、三浦と岡崎もいない。

朝の会になって担任に尋ねたところ、家にも連絡がつかず、無断欠席らしかった。

小百合、三浦、岡崎となると、小百合が危ないのは見えている。

担任に確認を取ると、八人は学校から飛び出し、それぞれ別れて血眼になって探している。

「どこだ・・・どこなんだ!?!」

きつと、昨日一緒にいるところを見られたのだろう。

やはり本部へ連れ帰るべきだったか。

こうなる事は予想出来たはずなのに・・・自分のせいだ。

それぞれ八人は思った。

ピストル

「がはっ・・・ぐっ・・・」

ゴッ ガンッ

「調子に乗るなって、言ったでしょ!」

「こんな洒落た髪型して来ていって、誰も許可をあげてねーよ!」

ドカツ

「がっ・・・」

一人の少女の手首足首を、縄で縛りつけ、暴力を加えている者達
がいた。

その数、男女十数名。

さらにその周りにはもつという。

それを眺めているのは、お分かりだろう、三浦和正と岡崎世良。

殴られ蹴られ、少女・・・小百合は朦朧とする意識の中、後ろ手
に携帯を隠し持っていた。

それは昨日、八人の「友達」から貰った物。

信用してくれるなら、持っていてくれ。このボタンを押せば、す
ぐに駆けつける。

助けてやるからな、心配せずに持っているよ。

そういつて渡され、別れた昨日。

本当に、頼っていいのだろうか。

厚かましく思われないだろうか。

でも、あの人たちの眼はまっすぐな眼だった。

こんな私を受け入れてくれた。

失いたくない友達。

だからこそ・・・頼るね。

小百合は、ボタンを押した。

ピピッ

若宮の携帯に、着信が入った。悠樹からだった。

「なんだ！！見つかったか！！」

「班長、小百合ちゃんからSOS来ました！！いま探ってますから、皆連れてF海岸周辺に来てください！！」

「わかった、すぐ行く！！」

七人が海岸に着くと、ものすごい速さでパソコンキーを打っている悠樹がいた。

悠樹はかなりのプログラマーなのだ。

「どう！？小百合の居場所、出た！？」

「もう・・・ちょっと・・・。。。。。。出た！K河岸沿いのB3倉庫だ！！！！」

「よし、いくぞ！！！！」

「ふふっ、いい気味。」

高みの見物と言ったところか、声を漏らしたのは岡崎世良である。

「ありがとう、遠藤君。おかげで気分が晴れるわ。」

「ハハッ、いいんだよ別に。俺もあいつ邪魔だったしさ。」

「でも、どうやってこんな人数そろえたの？」

「簡単だ。あのへんの中学生は金バラ撒いたら着いてきたし、あとはがこのボンクラ連れてきただけだぜ。」

「さすがね。ああ、ほんーつといい気味！アーっハハハハ！……！」
「ハハハハハハ」

ガラガラガラ　ガッシャアン！……！！

いきなり閉めていたはずのシャッターが上がって、辺りは静まり返った。

浮かぶのは、八人のシルエット。

最初に、三浦が口を開いた。

「なんだよ。お前ら。たったの八人で殴りこみかア？」

「三人は女よ？ばっかじゃないの？アハハッ」

途端に笑いが広がる。

「女なめんじゃないわよ！……！！」

し……ん

可憐が怒鳴った。

今度は五十嵐が怒鳴る。

「ソイツいじめるのは、俺達倒してからにしろよ！……！！」

「かかって来いやア！……！！」

京介の一声が運動会のピストルのように、8対50の戦いが始まった。

「もしかして・・・」

呑気かもしれないが、中継としてお伝えしよう。

50÷8は6・25だから、少なくとも一人六人相手をする
ことになる。

小学生一人が中学生六人の相手をするなどないと思われるが、大
丈夫。

B e c p 8だから。

まずは班長、若宮から。

若宮は武器もなし、素手である。

「なんだア？お前武器もな・・・グフツ！」

喋らせる間も無く、腹にパンチを入れる。

次の二人の蹴りを避け、頭を互いにぶつけた。

あとの四人より先にしゃがみ、足を延ばしてぐるっと周り、全員を転がして、こちらも腹に一発ずつ食らわせた。

「口ほどにもならないな。」

若宮、勝利。

続いて、巧。

一気に壁を駆け上がり、上からまず三人をノックアウト。

着地にさらに一人を蹴って押し倒す。

残りの二人が襲い掛かるが、寸前のところで避けた。

とどめにバック転で頭から蹴りを入れ、綺麗に着地した。

「俺の流儀は蹴りなんだな。」

巧、勝利。

三番手、紫乃。

彼女の手には鉄パイプの棒。

「はっ、女だからって容赦しねーぜ！」

一斉に襲ってくるが、紫乃はさりと避ける。

二人が棒の両端を掴み、奪い取ろうとしたが、平行に引っ張られてこける。

それを飛び越え後の四人ずつに棒を一突き。

「女だから、なめんなよ。」

紫乃、勝利。

次、京介。

軽い身のこなしで逆立ちをした。

「なにをする気だお前。」

「さあ、なんでしょう?。」

そのまま体制を低くして、回転した。要するに足が顔面にヒットしたわけである。

これにまず四人やられた。

回転をやめると今度は立って回し蹴り。

「回っても目は回んねえよ?。」

京介、勝利。

五番手、可憐。

「ハイヤア!!。」

可憐、空手は黒帯なのである。

ズッダーーーーーッ！！

見事、二人同時に背負い投げ。

ドタンッ

内股・・・

「私に敵はいないのよ。」

可憐、勝利。

注目、五十嵐。

まあ、彼はメンバー1の高速。

負けるはずもない。

「速っ」

姿が消えたかと思うと、一人の前に現れる。

何をされたか分からないまま、次々と全員倒れてしまった。

「一応・・・パンチ食らわせたんだけど。」

五十嵐、勝利。

「だ・・・大丈夫?!小百合ちゃん!!」

ところ変わって、こちらは悠樹、真理である。

彼達も強いのだが・・・6人にまかせて小百合を手当てしに来たのだった。

「う・・・」

「だめ。うごかないでね。」

体を起こそうとした小百合を悠樹は抱きとめ、ゆっくり言った。

「この傷・・・カッターかな?」

一番酷い傷を見、真理は聞いた。もしかして・・・

「もしかして・・・」(後書き)

遅くなってごめんなさい。

テスト週間だったので。

そろそろ第一章終わらせる予定なんですけど・・・。
第二章のテーマとか、リクエストお待ちしています。

入れ違いの二人

「何だ、もうやられちゃったか。」

中学生、高校生をあっという間に転がした六人を見、三浦和正・
・もとい、遠藤司は面白くなさそうに言った。

「・・・降りて来い。」

「はい、はい。」

若宮が、低い声で言うと、悠々と主犯は降りてくる。

「もう、つまないな。メイスイベントはこれからだったのに。」

「てめ・・・」

「止めろ、五十嵐。」

殴りかかるうとした五十嵐を、巧が止める。

「さて、聞かせてもらおうか。・・・遠藤司。」

「俺な、従兄弟がいたんだよ。そっくりの。しかも、超金持ち。親からも、誰からもちやほやされてさ、ぬくぬくと生きてやがった・・・。」

「お前と同じだな。」

「あいつは、俺の従兄弟で、血も繋がってた。けどな、あいつ言っただよ。お前なんか、生きている価値がないって。」

「ちょっと待て、なんでそんなこと言われないといけないんだ？お前が。お前はそんなこと言われなくてもいいはず・・・っ！まさか！！！」

「そ、俺は金持ちでもなんでもない、普通の貧乏人だった。あいつは、俺のこと要らないって言っただ。そして、俺は思った。なんでも普通だったら要らないのかってね。」

俺の本当の名は

三浦 和正だ。」

「簡単だったよ。そっくりだしさ、入れ替わればいいんだから。」

「そ、それで、あんた、もしかして・・・」

「理解が遅いな。だから、」

殺したんだよ

ガンッ

鈍い音がしたかと思うと、三浦は紫乃に胸倉をつかまれ、壁に押し付けられていた。

「っ何しやがる!!」

ドカッ

「やめろ!紫乃!!」

紫乃は三浦を殴ると、胸倉から手を離した。

「お前、俺に何したかわかってんのか?!」

孤独

「・・・お前、自分が何したか分かってんのか、だと？」

紫乃は、ゆらりと言った。

「それはこっちのセリフだ。」

握られた拳から、血が滲んでいる。

「お前は分かるはずだ。ただの人間、普通の生き方をしていたなら、自分の勝手に他人を巻き込み、傷つけ、ねじ伏せる・・・最低なヤツとは違ってな。」

「お前に何が分かるんだよ！！俺はずっと孤独だった！！だから、入れ替わって「最高」を手に入れたんだ！！・・・そして・・・」

「でも孤独、でしょ？」

可憐は三浦の肩にそつと手を置き、正面から覗き込んだ。

「俺達も、そうだぜ？」

と、五十嵐。

続けて、悠樹。

「そうだった、かな？」

「いわゆる天才児ってだけだった。」

切なさそうに、巧が言った。

「でも今は、違う。こうして仲間と出会えて、最高って言うんだ。」

にっこり笑って、京介が言った。

若宮は、真理と共に三浦の前に歩み出で、手を差し伸べる。

「その、「最高」に出会えて初めて、罪を償えるんだよ。」

「ゆっくりでいい、まずは孤独と言つ名の地獄から、抜け出すんだ。」

三浦はうつむいていたが、やがて顔を上げ、若宮の手を掴む。

「いいのかよ。俺は殺人者だぞ。それに、今まで散々酷いことをしてきたわけだし・・・鮎川だって!!」

「いいんだよ。自分のしたことを受け入れられるのだったら。」

「まあ・・・。」

若宮に、京介が付け足した。

「受け入れられないで、ただ暴走するんだったら、そんだけの器だったってことだ・・・そんだけの器だったヤツもいるみたいだけどな。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7082g/>

Bec P 8

2010年10月10日07時37分発行